解説・報告

—海外で活躍する獣医師（XII）—

地　球　の　お　医　者　さ　ん
～在ケニア日本国大使館勤務～

永長大輔[†]（環境省中国四国地方環境事務所・次長）

1　は　じ　め　に

私は2008（平成20）年に大学を卒業し，環境省に総合職（旧Ⅰ種）自然系職員として採用された．環境省の採用枠には農林水産省や厚生労働省が行っている獣医系技術職員枠（獣医師免許保持者を対象とした採用）は存在しないものの，すでに選考採用や理工系技官として採用された獣医師免許保持者が数名働いていた．その当時は他の獣医師免許保持者の職員の在籍状況について知らなかったが，獣医師免許保持者がⅠ種試験（農学Ⅲ区分）を受験して環境省に入省した（プロパー）職員としては初めてのケースであった．私自身はその後，国立公園の保護管理の許認可業務の窓口であったり，国内希少野生動植物種の保護増殖事業を実施する現地事務所の自然保護官も含め，表のようなポストを経て，2020（令和2）年9月に在ケニア日本大使館（以下「ケニア大」という．）に赴任した．今回は外交官として，またケニアの首都であるナイロビに本部を置く国連環境計画（以下「UNEP」という．）及び国連人間居住計画（以下「UN-Habitat」という．）の常駐副代表として任地に勤務した時の経験についてお話し，国家公務員の業務内容を知ってもらうとともに，今後世界で活躍したいと考えている若手獣医師の参考にしてもらえれば幸いである（南半球に国連機関の本部を設置しているのは，前述の2機関のみ）．なお，本投稿はあくまで個人の私見に基づくものであることを前提に読んでいただきたい．

2　コロナ渦での引越しとリモートワーク

相模原市に位置する外務省研修所での2カ月程度の研修を終え，本省外来生物対策室に所属しながら，赴任に向けさまざまなワクチンを接種したり，引越し荷物を船便に出したりと忙しくケニアへの赴任準備を進めていた矢先の2020年3月18日，ケニアにいた前任者から「ケニア政府が新規で入国する外国人は外交官も含め入国禁止処分とすることを決めたため，永長さんの赴任は延期されることになった．」という電話連絡があった．家には冷蔵庫と布団だけが残っている状態の出国5日前の出来事だった．すでに異動の発令も出ており，新型コロナウイルス感染症によるケニアの渡航延期措置がいつまで続くか分からない状況であったことから，環境省の併任をかけ直し，親の家がある沖縄に転勤することにしてもらい，4月から本務はケニア大，沖縄奄美自然環境事務所国立公園課併任，という2足のわらじを履くこととなった．日本とケニアは6時間の時差があるため，昼間

表　筆者経歴

異動時期	所属・官職
2008年4月	自然環境局野生生物課鳥獣保護業務室・係員
2009年4月	関東地方環境事務所国立公園・保全整備課・自然保護官
2010年4月	西表自然保護官事務所・自然保護官
2013年4月	自然環境局自然環境計画課・生物多様性地球戦略企画室・係長
2015年4月	内閣官房東京オリンピックパラリンピック競技大会推進本部事務局・主査，参事官補佐
2018年4月	四国事務所国立公園課・企画官
2019年9月	自然環境局野生生物課外来生物対策室・室長補佐
2020年4月	沖縄奄美自然環境事務所国立公園課・課長補佐
9月	外務省在ケニア日本大使館・一等書記官
2023年4月	沖縄奄美自然環境事務所野生生物課・企画官
2025年4月	中国四国地方環境事務所・次長，（併）課長

† 連絡責任者：永長大輔（環境省中国四国地方環境事務所）
〒700-0907　岡山市北区下石井1-4-1　岡山第2合同庁舎11階　☎086-223-1586
E-mail : DAISUKE_NAGAOSA@env.go.jp

は環境省の業務を，夜はリモートでケニア大の業務を行うという異例の状態が9月まで続いた．後にも先にも在外公館と環境省の出先機関の併任辞令は初めてのケースだったと聞いている．ケニア大のUNEP常駐副代表ポストはこれまで代々環境省自然系職員が勤務していたことから，過去に勤務したことのある先輩方からケニアでの生活や業務についていろいろと話しを事前に伺うことができた．

一番上の子どもがまだ小学生であったことから，ケニアには家族全員（妻と3人の子ども）で赴任した．また，日本からケニアへの移動は中東の航空会社を利用したが，コロナ渦であったため，2～30人程度しか飛行機に搭乗している人はいなかったと記憶している．

3　外交官と環境省自然系職員

私のケニア大での任務は，経済協力班と国連班（現在の在ナイロビ国際機関政府代表部）に所属し，一等書記官（First Secretary：本省課長補佐級）としてケニアへのODA支援を行いつつ，UNEP及びUN-Habitatの常駐副代表（DPR：Deputy Permanent Representative）としてナイロビに本部を置く国連機関の日本政府の外交窓口を務めることであった．

常駐副代表としてUNEP及びUN-Habitat両機関の常駐代表委員会などに大使の代理で出席し日本の立場を積極的に発信したり，小委員会等を通じて，各国やナイロビに事務所を構える国際機関の事務局との情報収集，意見交換，調整，邦人への人事支援等を行っていた．

あまり詳しいことは守秘義務の関係で記載できないが，海洋プラスチック汚染を始めとするプラスチック汚染対策に関する法的拘束力のある国際文書（条約）を議論するための政府間交渉委員会（INC）の立ち上げに向けて，UNEPの関連会議で日本の立場を主張したり，各国代表と議論もした．また，国際交渉のための日本代表団がスムーズに会議に出られるよう登録のための口上書を作成したり，治安のよい地域の宿舎や移動手段の確保，会議場での作業スペースの確保等の受け入れロジといったまさに大使館の業務ということも行った（図1）．

環境省の自然保護官や国立公園管理官は，国立公園や鳥獣保護区の管理のために自然環境の保全の最前線の地域に住み，地域の住民となりながら国立公園の保護と利用，希少種の保護や外来生物対策等に地域住民や自治体と取組んでいる．現場の職員が少なく，情報収集，調整，業務の発注・管理等を一人で何でもこなさなければならないことや積極的に関係者と信頼関係を作り，最後は人と人の関係でものごとが進んでいく感覚が，環境省の自然系職員として取組んできた姿勢や業務の進め方と似ていると感じた．

図1　国連ナイロビ事務所の議場

4　バイとマルチ

バイはバイラテラル（bilateral）の略で二国間という意味で用いられる．またマルチはマルチラテラル（multilateral）の略で，多国間という意味で用いられる．例を挙げると，ODA支援のような日本がケニアに支援を行うというものがバイで，国連での日本の立場を主張し交渉することはマルチといえる．

バイでは水衛生と環境を担当した．日本では蛇口をひねれば安全な水が手に入ることが当たり前だが，世界にはまだまだ安全な水を手に入れることができない人がたくさんいる．アフリカの途上国は年間降水量も少なく，上下水道のインフラも地方では整っていないため，子ども達が学校にも行かず遠くの井戸や水場まで汲みに行くことが日課となっていて，飲み水や手洗い，トイレに流す水の確保がまだまだ大きな課題となっている．地方の小学校や中学校にトイレや手洗い場を設置した時の子どもたちや地域の人々が式典では必ず歌や踊りで感謝の気持ちを表してくれる．そういった姿をみると，水の重要性を改めて感じることができたし，何より子ども達の勉強時間の確保や感染症のリスクが減ることにつながるので，個人的にも涙が出るほど嬉しかった．また，かつて戦後日本が受けていたような支援を途上国に行えることが，感謝のリレーを繋げることになり，サブサハラでは比較的発展しているケニアが他の開発途上国の開発を支援する南南協力の促進にも繋がることを期待したい（図2）．

ケニアの一般廃棄物の最終処分場はオープンダンピング方式と呼ばれるただゴミを積み重ねるだけの処分方法である．ナイロビは400万人を超える人口がいるといわれているが，最終処分場はダンドーラと呼ばれる1カ所しかない．ナイロビは都会で開発できる土地も限られていることから，なかなか新規の最終処分場を設置できない状況にあった．分別していないことから，ゴミは焼却減容化しておらず，処分場の計画埋立容量をすでに超えており，どんどん周囲に拡げざるを得ない状況にあった．また，分別をしていないため，最終処分場でウェイスト

図2　UNICEFを通じた学校へのトイレ支援

図3　ダンドーラ最終処分場

ピッカーと呼ばれる人々がリサイクルできる資源物(ペットボトルやビン等)を集めリサイクル業者に売っている．トラックがゴミを搬入し，重機でそのゴミをならしている中での作業となるため非常に危険である．また，焼却も分別もしていないことから，発酵や化学反応が起こり自然発火している場所もある．驚いたことにウェイストピッカーの一部はダンドーラの中に住んでいた．そこには教会も存在し，牛もゴミを食べて暮らしていた．私にとってはケニアでみた一番衝撃的な光景だった（図3）．

マルチでは前述したように，国連の会議への対応が主な業務だった．UNEPには任意拠出金もさまざまな目的で拠出していたため，その支払い手続きを行っていた．運がいいのか悪いのか，バイとマルチの外交を担当させてもらえたことは自分の視野を大きく広げることにも繋がったと考えている．

5　ケニアでの生活

ケニアと聞くと赤道直下に位置していることから，暑いんでしょと問われることが多かったが，首都ナイロビは標高が約1,700 mと高く，年間を通じて最低気温13℃，最高気温28℃程度に収まっており，寒くも暑くもなく，湿度も低くカラっとしていて快適だった．四季がないのが逆に新鮮だった．ただし標高が高いため，アパートの4階に階段で昇るだけで毎日息が切れていた．

図4　サファリカーからアフリカゾウを観察

ナイロビは東アフリカの中心都市で，30階を超えるビルもあり，経済発展も著しいことから貧富の差が激しかった．このため，昔に比べて治安が悪化しているといわれている．私が住んでいたアパートは電気柵に囲われて，24時間警備員を複数名雇っていた．大使館も注意喚起しているように，治安が悪いため，基本的にナイロビ市内では車移動が基本であり，家の前を散歩したいという気持ちが何度も湧いてきたが，グッと我慢してアパート内の庭を歩いたり，周囲を柵に覆われた公園に車で出かけて散歩をしたりしていた．

買い物はフランスに本社があるカルフールがショッピングモールに入っていたためよく足を運んだ．ローカルマーケットの方が圧倒的に（5分の1くらい）安かったが，治安も悪いため行くことはなかった．

ケニアといえばサバンナのイメージが強いと思うが，まさにそのとおり，ナイロビを少し出れば広大な草原が広がっている．しかし，意外と思われるかもしれないが，北には砂漠地帯が広がり，西にはカカメガ森林国立保護区という熱帯雨林地域もあり，東はインド洋に面し，西端はヴィクトリア湖に面していて，中央には標高5,000 mを超えるケニア山が鎮座しており，オルカリアと呼ばれる地域には温泉も湧きだしており，一つの国の中でさまざまな気候条件と自然環境を見ることができる．休暇を利用して国立公園や国立保護区に家族でちょこちょこ出かけサファリを楽しむこともできた（図4）．

アフリカ最高峰のキリマンジャロはケニアのアンボセリ国立公園から綺麗に見えるためケニアにあると思われがちだが，実際にはタンザニアにある．ケニアではないものの，隣国にアフリカ最高峰の山があったので，私もアフリカに住んだ記念に登ってみた．ポーターやコックを雇って登るものの，頂上は5,895 mあるため身体は重く，大変だったので，もう二度と登らないと心に誓った（図5）．

ナイロビにはアフリカに3校しかない日本人学校が開校している．わが家は自宅から遠かったこともあり，インターナショナルスクールに通わせていた．さまざまな国籍の人と同じクラスで生活し，いろんな文化に触れる

図５　アンボセリ国立公園にてキリマンジャロを望む

ことができたことはいい経験になったと思う．

６　ケニアで学んだこと

初めての海外での生活がアフリカのケニアだった．海外旅行や海外出張は経験していたが，ずっと日本で生活し，日本社会になじんでいたところ，この赴任によりさまざまな常識が崩れた．例えば，強盗に狙われる可能性があることから同じ時間に同じルートで出勤しないとか，商品に値札がついていない場合は人を見て値段を変えてくるため必ず価格交渉をしなければならないとか，日本ではなかなか経験できないことだったと思う．また，自分がマイノリティーな存在で生活することで，海外から来る外国人が感じていることや苦労も理解できるようになったので，自然と日本に海外旅行で来ている外国人には優しくしてあげたいと思うようになった．

アフリカの高官は，客人を待たせることで自分の偉さを誇示するということを聞いた．これは相手が待ってでも会いたい重要人物であるということを確認しているのだと思う．実際，大統領の出席するイベントは時間通りに始まらないのだが，その裏にはそういった意味が隠れているということも駐在してこそ知れた文化だったと感じる．

テレビや本で知識として貧困問題や環境問題を知っていたが，実際に自分の目で見て，耳で聞いて，匂いも感じることは強く記憶されるし，感情も揺さぶられる．現実の課題を自分の目で見ることはやはり重要なことだと改めて感じた．

日本の優れた技術はさまざまな分野に存在していることも外交官をすることで知ることができたし，海外で日本がどのようにみられているのか，それをさまざまな国の人から聞くことができたことも海外生活ならではのことだと思う．日本人の先人達の誠実な対応が日本人への信頼感を高めているということを改めて感じたし，それを次世代につないでいかなければならないと強く思った．

７　終　わ　り　に

私の体験記を長々と書いてきたが，「かわいい子には旅をさせよ」ということわざのように，若い人こそ海外で苦労をしてさまざまな経験を積んでもらいたいと思う．海外で仕事をすることで，グローバルスタンダードを知ることもできるし，逆に日本のリードしている分野や素晴らしい点を知ることができると思う．日本の食事はこんなにも美味しいものだったのかと帰国して改めて感じているし，これだけ不安なく夜に街を歩けるのもすごいことだと感じる．

環境問題や感染症対策も国を超えて連携して対策をしなければ解決できない時代になっている．まぎれもなく，獣医師はワンヘルスの取組をリードする存在であるからこそ，世界を知り，世界と連携し，地球のお医者さんとして活躍する人材をこれからも日本が輩出し続けるようにしていきたい．

最後に，私が国家公務員であるため，全国転勤が続き，さらにはコロナ禍にケニアまで一緒についてきてくれた妻と子ども達に心から感謝している．また，こうした自身の経験をこれからも後輩たちへ伝え続けたい．